

案

京都文化創造への提言―スポーツ・芸術を中心として―（課題）

京都アートカウンシル第18期副代表

千賀 康利

◆はじめに

京都は、日本文化の担い手として多様な顔を持つ都市である。健康文化都市としての京都を考えると、特定の課題に特化するのではなく総合的な人間文化の創造を視野に置いたまちづくりが必要である。

京都アートカウンシルは、文化の基本的な課題として身体論や芸術論を中心とした京都文化の発展を願い、スポーツ文化のまち・芸術文化のまちとしてのさらなる発展と充実をめざして提言をまとめることになった。本来、生活文化の営みとしてスポーツ活動（身体活動・健康スポーツ・競技スポーツ・演劇やダンス・禅道・茶道・華道・香道・武道など）と芸術活動は身体表現として共通の領域にあった。身体文化として、スポーツと芸術の視点から京都文化の充実・発展について検討してみた。

◆廃校になった番組小学校の将来

小中高の学校の役割は、単に教育機関のみの役割を担うのではない。特に、義務教育機関は地域との交流という大切な役割を担っている。近年は児童や生徒が被害者になる悪質な事件が多発するなど、またモンスターペアレントといわれる利己主義思想の親子によって地域との交流が困難になるなど、信頼関係が築けなくなってきている。しかし、その根本的な原因は、地域との連携を密にするなど問題を社会と共有しながら解決するという、民主的手続きによる十分な話し合いをしてこなかったことによるところ

が大きい。学校は、個の成長の手助けが主であるが、個の家庭と共同体の社会との間合いを良好にするなど、民主的手続きの手助けをする一つの公的制度でもある。

生徒や児童、親、学校、行政、警察、司法など、地域が総力をあげて対話による解決をめざすことが、民主社会の成熟には必要なのである。官の縦割り行政そのものが、民主的な手続きとは相容れない仕組みなのである。民主社会における縦割り行政は、単なる手続きであり目的ではない。公的な施設や設備を、官・民・学校・企業社会の連携による民意によって運営し、地域の文化を創造する運命共同体によって維持管理ができないものか検討することは社会的意義のあることである。芸術は文化の要であり、いろんな分野の芸術家が連携し社会と一体になって文化を創造することは民主社会において大変意義の深いことである。

◆学校の地域性

住民主導の番組小学校（1869年地域住民によって設立された小学校）は、明治期に国の教育政策よりも先んじて実行され、地域の協力共同を深め民主的な共同体の魁ともなった。この、住民主導の学校づくりは、市民主体の民主的な教育制度を生み出し、今日の京都文化の形成に大きな影響を及ぼした。しかし、今は、行政権の力のほうが大きくなり、府や市および国の支配が強くなってしまった。教育は、郷土愛を育むことが重要であり、郷土を愛することのできない愛国心の強要は決して国民を幸せにすることとはない。番組小学校の跡地利用は、単に、おらが創ったおらが町の誇りという狭い地域愛に止まらずに、これまでに担ってきた文化を継承し発展させる新たな役割を模索することが社会的にも求められており必要にもなってきている。繁華街にある立誠小学

校が廃校になって、木屋町には京都にはおよそ相応しくない風俗産業が乱立している。地域住民が少なくなり、カラスの餌場となった町内は醜^すえた臭いのする住民不在のはき捨て経済地域になってしまった。地域住民が主体のきれいな町の風情が取り戻せないものかと考える。そこに住んで、育つて、仕事して延々と築いてきた「門掃き精神」を育んだ協力共同のものづくりの町が日本の文化を象徴する京都なのである。京都のみならず、それぞれの地域の「らしさ」は地域文化そのものであり、継承されてきた文化を守り発展させる京都らしさの議論も重要である。他の廃校小学校においても老朽化は避けられない。地域の思い出を大切にしつつ将来に展望を開くためには、新たな施設設備の設置や従来の施設設備の維持管理費の捻出が基本的な課題となる。

◆学校の仕事

今日の教育は、丸暗記、絶対的正解を強制するような入試教科重点に傾倒し、青年期や児童期の発育発達に不可欠の野外学習や実験などの最も重要な体験教育を軽視する傾向を強めている。外あそびによって自然と対話し、その変化を学びそれに対応できる、考える力や応用の力をも身につける機会を保障することのほうが重要である。ダーウィンの進化論の一節に、「生き残れる人間は、優秀なものでもなく、強いものでもなく、変化に適応できるものである。」という論述がある。まわり道をしながら多くの情報を整理し相対的な答えを導き出す、真の「ゆとり教育」が求められている。我が国のゆとり教育は、人間の重要な教育再生の機会をとりこぼし、ゆとりを理解しない未成熟な日本社会に押しつぶされてしまった。ファールブルもピカソも、熊楠も若冲も、壮大なゆとり

学習によって個性的な成長を獲得した。知的好奇心を刺激し学習の意欲や成果を担保するのは、教室での知識吸収中心の学習ではない。そして、社会性の育成は、いろいろの友達がいて、いろいろの遊びができて、日々変化し進歩する人間関係を体験し学習できるゆとりある学校環境によるところが大きい。

小学校では、定量化されていない「学力」をテスト化し、中高では入試科目重視のカリキュラムを強化するなど、個性を伸ばし多様な能力を育成するという本来の教育目的とは乖離した方向性を強めてきている。そして、学習塾の予備のような進学のための授業が主体となり、ゆとり教育は消滅した。大学では、就職活動に追い回され、講義・実験実習・ゼミ・卒論という学士力を養成するカリキュラムが実行されていない。学校は勉強するところであるが、知識の吸収だけに依存してはならない。

◆廃校後の役割

一方で、少子化により小学校の施設にゆとりが生まれ、高齢者や保育児との共同使用なども行われるなど、地域との交流が見直されてきている。そして、廃校になった番組小学校では、学校博物館や地域研究会、地域のスポーツ活動や芸術などの各種文化活動の拠点として地域交流の役割を果たしてきている。京都芸術センター（旧明倫小学校）、京都国際マンガミュージアム（旧龍池小学校）、こどもみらい館（竹間小学校）などは成功例であろう。しかし、その実態はそれぞれの地域や個別組織限定の運営に止まっており、施設、設備や建物などの管理運営における維持管理経費（ランニングコスト）を担保する市民参加の運営の仕組みにはなっていない。そして、成長し将来の担い手となる子供の遊ぶ姿が日常になっていないことも将来性の不安を大きくしている。イベ

ント開催に止まらず、日常的な生活の一部として使用され、京都文化の発信基地としての役割を展望することが重要である。そのためには、京都全体が関わって共同運営するというような、新たな対策が必要であろう。

◆新たな文化の創造

古くは国鉄、専売公社、郵政事業などが民営化され、これまで国益と隣接する産業であった農業や漁業も、林業も含めて近代化経営が求められて来ている。使われなくなつた公共の施設を、民間に売却したり無意味に建て替えたりするだけでなく、公共性を担保しつつ市民や産業、大学や行政の力を生かして様々な文化創造の拠点として再生させることも、文化都市としてのあるべき姿ではなからうか。

廃校になつた学校やその他の公共施設を活用し、スポーツや芸術および京都の伝統的な文化（茶道・華道・能や狂言・武道や禅道・伝統工芸など）の交流と発展および世界への発信を目的にした文化創造の共同事業が可能ではないかと考えられる。大学間共同事業として発足した大学コンソーシアム京都は、民（市民）・学（大学）・産（産業界）・官（行政）の参加による新たな運営組織として京都の活性化に貢献しており、自立と共同という本来の民主的な社会を目指すための試みでもある。

世界への文化の発信と新たな文化の創造という、平和を追求する為の大きな役割を担うためには従来の縦割りや専門性分離型の組織運営では対応しきれない。分業という卓越されたものづくりの仕組みを継承しつつ、さらにそれを超えた幅広い情報交換と分業のあり方を支援する仕組みが求められている。観光立国、日本の基礎となる文化は、ものづくりにある。国際的な経済行動も観

光産業も、文化が根底に据わっていなければならない。

∞スポーツの共同事業

京のスポーツは、中学・高校では全国レベルで活躍しているが、大学においては東京および関東にある大学の活躍が圧倒的に優位にある。東京オリンピックを契機に東高西低の減少が固定化してしまつた。その要因は、スポーツ系の専門大学（体育大学）が無かつたことと、狭い京都の地では十分な施設設備の整備ができなかったことと、指導者の不足などにあつた。特に関東のスポーツ系専門大学では、施設・設備の充実や、特待生として学費免除や奨学金の給付、指導者の育成など、スポーツに専念できる環境が整つていた。その頃、京都地区の大学では、不正入試の温床としてほとんどの大学がスポーツ推薦入試を廃止していた。推薦入試が解禁になつた今日においても東高西低の現象は変わっていない。現在のスポーツ環境では、体育の教員募集の減少に伴つて、就職に有利な他の学部を志望する傾向にあり、スポーツ系の少ない京都の大学においても大学スポーツの活性化は可能になつている。しかし、そのためには、京都が総力を尽くして選手の成長を助けるなど、スポーツ文化の向上を目指す魅力的な施策を提供することが重要である。

基本的な課題としては、施設・設備の充実である。近年京都の大学でもスポーツ系の学部の新設が増えている。しかし、体育系だけでは魅力が無く、スポーツドクターやメディカルトレーナーなどの資格を視野に入れた、健康とスポーツを抱き合わせた医学系との連携の傾向が見受けられる。それでも、施設・設備に負担が大きく市内には開設できず、市外や他府県への進出を余儀なくされている。京都のスポーツ活性の効果には繋がらない。京都市

内に位置する大学では、スポーツ系の課外活動は相変わらず貧困の環境にある。やりたいスポーツが無い、施設が無いなど、学生は市内、市外を含めて活動場所を求めて奔走し時間ロスは避けて通れない課題となっている。スポーツ文化の共同事業は、学生の個性を尊重し持っている能力を引き出す人材育成の手助けにもなる。

学生自治による課外活動は、自立と共同の精神や社会性の育成など、正課授業と同等に重要な教育の機会である。市内にある大学の学生は、課外活動を通して交流が密となっている。多様な領域での交流や学習が可能になるなど、京都の地域特性ともなっている。また、地域や大学、社会人による共同利用ということで、施設・設備の管理運営などにおいて将来的な見通しが期待できる。地域への還元として、少年スポーツや地域の人々への指導者の提供や共同の活動が可能になる。特に、子供にとって大学生との交流は大きな刺激となる。また、教育施設ができれば地域の環境整備にも繋がる。そして、少子化により全国の大学で定員割れが起こる中、魅力ある大学づくりをめざし多くの学生を京都に迎えられるなど、大学の町としての充実もはかることができる。

日本の国民は、世界でも多くのスポーツ種目を実践しており、スポーツは国民の文化活動として重要な役割を果たしている。そして、グローバル化されたスポーツは国際交流においても大きな貢献を果たしている。1912年の第5回オリンピック（以降、五輪）で、古代五輪にならって建築、彫刻、音楽、絵画、文学の5種目でスポーツを題材にした作品の競技会が開催された。1952年第15回五輪からは競技から外され、芸術展示として引き継がれた。1964年の東京五輪に美術部門（古美術、近代美術、写真、切手）、芸能部門（歌舞伎、人形浄瑠璃、雅楽、能楽、古典

舞踊邦楽、民族芸能）が再開された。その後、文化行事として五輪に引き継がれてきた。本来、五輪は文武両道を目指した総合文化の行事である。スポーツの共同事業では、多様なスポーツ実践の要求に応えスポーツ文化の向上に繋がると共に、いろいろの種目で将来のオリンピック選手の輩出も夢ではなくなる。

⑧ 芸術・芸能の共同事業

京都は日本を代表する芸術・芸能・伝統工芸のまちでもある。単なる技術や技能の伝承だけでなく、歴史を受け継ぎ、使いやすさや洗練された姿形、世代を超えて使える飽きない品質、それを使いこなす生活文化の継続など、世界に誇れるものづくりのまちである。

東京、大阪など主要都市が戦禍に巻き込まれ、焼け野原となり多くの文化財を焼失させてしまった。偶然に戦禍を免れた京都は、先人が築いた神社仏閣などの建築物や江戸時代に花開いた芸術や芸能および伝統工芸など、貴重な文化財を今日に引き継ぐことができた。和装・和食・木造建築・焼物・漆器など、和の衣食住の文化は千年を繋いで維持されてきた。そして、それらの多くが、京都や日本だけで無く世界から認められる人類的な文化資産としての価値を持っている。これを守り発展させてゆくための人材の養成や育成がもつとも緊要な課題となっている。京都には、芸術系の大学や専門学校が多くある。伝統工芸については、ものづくりの人材養成として市政に盛り込まれるなど重点化が図られている。伝統工芸の引継ぎには、単に技術を受け継ぐだけでは将来性は担保されない。さらに、洗練された作品や商品を生み出す高い技術力や、物事の微妙な味わいを感じ取りそれを具体化する表現力や判断力が必要となる。それには、さまざまな視点からの美的

要素を加えることが重要で、芸術関係の関わりが必須となる。さらにこれらのうつくしさに加えて、使いやすさや丈夫さなど、洗練された機能の追求も必要で、様々な分野と交流しそれらを世界に発信し産業化する施策も講じなければならない。そして、これらの工芸品や芸術作品を生活に取り入れる市民の文化的資質を育てることも芸術関係の責務になる。そのためには、芸術と地域や産業および市民生活との交流などを深めることが必要である。京のまちは、衣食住、経済、産業、行政など、生活の全てにおいて美的感覚を取り入れる目利きの生活文化都市でなければならぬ。他の都市から京都府内に移住する芸術家が増えている。基幹産業の茶業は後継者不足で人口も減少傾向にある南山城村では、移住してきた芸術家を中心となって村の活性化に貢献しつつある。

他の地域にも芸術（ものづくりと生活文化）で繋がるまちづくりが増えてきている。京のまちには、芸術活動を行うのに必要な文化的要素を持った魅力ある空間がある。しかし、一部には町家を改装し共同利用する場合もあるが、市内ではアトリエの確保が困難という芸術家も多い。芸術系に学ぶ学生の卒業後の活動の支援も必要で、情報の提供や共同のアトリエの確保なども課題である。

京都の太秦は日本のハリウッドと称され、東映・大映・松竹をはじめにそれを支えるスタジオ（東宝）や高津商会（映画専門の小道具の貸し出し）、映画館などの映画産業が繁栄を極めていた。いたるところにあった映画館は、そのほとんどが閉館してしまった。京都で作られる映画のほとんどは時代劇であった。神社仏閣が多くありロケ地に困らなかった。今でも古い時代劇を見ると、ロケ地のほとんどがわかる。現在はテレビやDVDで、池波正太郎や藤沢周平、ライムライトなど時代劇の復活も見られる。太秦の映画村、文化博物館、芸術センター（明倫小）やアスニー、立

誠小の映画発祥の地としての取り組みは、古い映像文化の保護と併せて、新たな映像文化の創造拠点としての挑戦も必要である。京都花月を閉じて久しくなり、落語発祥の京都に常打ち小屋が無いのが寂しい。京都の文化として継続される仕組みが必要と考える。落語発祥の地、北野の地域では寄席を創りたいという有志が集っておられるようです。しかし、大阪のような形態で定席寄席を持つことは、多文化の京都ではかなり困難なことと想像できる。しかし、定席としての場所の提供などは産・官・学・民の共同によって可能だと考えており、市民参加による何らかの運営方法は考えられる。学生や市民と落語家が競演できる常設寄席などが考えられる。

さらに、一人芝居や大きな劇場を使えない若い人が表現できる芝居小屋（小劇場）や音楽やダンス、ジャグリングやマイムなどのストリートパフォーマンスなどへの場所の提供、そして日本のまつり文化である盆踊り文化の交流の場としても、共同事業が期待される。京は、ジャズ文化にも造詣が深い。金沢にはジャズのブルーノートを蓄音機で楽しめる蓄音機館があり、すばらしい文化の保存がされている。クラシックジャズのファンにとっては羨望の取り組みである。

⑧ 伝統工芸の共同事業

和食が世界文化遺産になりました。日本の食文化の豊かさが世界に認められたのです。単に星が幾つかというような外食を中心とした認定ではない。家庭料理（おばんざい・郷土料理）・薬膳料理・精進料理・茶懐石・京会席・有職料理などの総称が和食である。自然に感謝し、食材を全て使い切るという食べ物を大切にす合理的（もったいない精神）や、健康食としての完成度の高さ

が和食です。色や音や歯ざわり、舌ざわりなどの食感を楽しむ、器を楽しむ、庭を楽しむ、そして四季（旬）を楽しむというように、美味しく食べる工夫が総合されたもったいない精神の日常の食生活そのものが日本の食文化なのである。和の食文化には、味だけでなく美味しく食べるための様々な工夫には芸術性も大きく関与している。どこ家庭でも料理屋さんでも使っていた竹製品も、プラスチックやステンレス製品に変わってしまった。和の食文化には、やはり木や土物、竹やガラスなどが似合う。世界文化遺産になった和食文化も、伝統工芸との二人三脚があつてこそさらなる前進があり、日常生活そのものになつてこそ食の文化が深まる。

「高度経済成長」を終え、急進した日本経済に引きずられ行方を誤った企業や産業もある。生活様式の変化によつて、京都の産業を支えた西陣や室町の繊維産業が衰えてしまった。同時に、分業のものづくりにも、後継者の育成など、継続が困難になる事態を招いている。和装の衰退は、繊維や染や刺繍の技術が衰えたのでは無い。和の技術は、洋服にも十分に活用できる。羽織袴や紋付、振袖などの伝統的な着物も、日常的な衣類としては用いられることが急減するなか観光客の和装が多くなつてきている。しかし、観光客の貸衣装には一層の工夫が必要である。

日常生活での和装は、通気性や保温性、吸湿性および行動性に優れており、作業衣や野良着、柔剣道や古武道の衣類など決して洋装に劣るものではない。伸縮性の優れたジャージは除いて、作業衣や道着の行動性は、上肢や脚の可動を抑制する収縮の少ないシャツやパンツよりも優れている。作業着や生活衣類としての和装の日常化への工夫が望まれる。ファッションは、芸術的な感性と科学的な効率性と一体化してこそ、多くの人に活用される。み

やこめつせ(旧勸業会館)は伝統産業の振興と発展を目途に創られた。しかし、日常的に後継者を育てるいわゆるソフト部門の機能が弱い。伝統工芸の共同事業では、みやこめつせなどの産業振興事業との連携をさせるなど、多様な視点に置ける伝統産業への関わりによつてその振興と発展の実体化も期待できる。京の祭りや伝統文化には、欠くことのできない手業がある。それらの多くは、伝統産業として京の文化として広く知られてきた。しかし、分業のためそれ自体が主役となつて製品化されることは極めて少ない。それらの技術を他にも応用できるよう、新たな視点による産業の創生が急がれる。

伝統文化の共同事業

京のまちには、禅道、茶道や華道、書道、武道（柔道、剣道、空手道、合気道、拳法、古武道など）、能や狂言、歌舞伎、京舞、和食（おばんざい、菓膳、精進、京会席、茶懐石、有職料理など）、三味線、琴、尺八、雅楽、祭りなどの伝統が生活文化として息づいている。そして、これらの文化を支え発展させるものづくりの文化も継承されている。伝統文化の継承には、市民文化との共生が重要で、それを支える技術や産業、市民文化が協力共同し合つてこそ成り立つものである。しかし、生活様式の変化など、伝統文化の生活化は大きな変わり目の最中にある。

生活様式の変化に、住まいの様式変化がある。床の間がない、畳がないなど、生活空間が洋の様式に大きく変わってしまった。それでも、工夫次第で和の空間は作れる。公的な美術館に和の文化を披露する仕組みや装置がみられないなど、和の空間を生み出すための情報の発信が弱くなつてきている。日本建築による、和のギヤラリーの復活もあわせて、和の生活文化の復活と新たな空間（間）

を考えることが必要である。京都アートカウンシルの課題としても、立誠小のキャンパスに新たな感覚も加えた和のギャラリーを創造するなど、和の創生の工夫が待たれる。伝統を支えるためには、それらの価値を共有し継承し実践する市民と共に育つてゆくことが必須となる。伝統文化と市民文化の距離を共有し、狂言を親しみやすい文化とした茂山狂言会の工夫は、文化発信の教訓に値するものである。

日本人は自国の文化を語れないと言われている。その大きな要因に、文化を日常生活と切り離し特別なものとして教育されてきたことがある。日本の文化を象徴するような価値の高い、日本人なら誰もが知っている、出来るといような生活習慣が身につけていない。そして、最も基本となる日本文化の要になるものづくりやそれを使った道の文化が日本人に伝わっていない。ものづくりは職人で、お茶やお花はそれを職業とする人の占有物のように思われている。手作りの日用品や、花一輪でもてなす気遣いも生活文化であり、伝統文化を取り入れている。

子供のころに親しんだ習字は、文字を書く基本になり、そろばんは暗算の役にたち買い物で計算をたちまちにできるといいう能力を多くの日本人が持っていた。手先の器用さの訓練にもなっている。今はそれさえ危うくなっている、文化を共有する教育が緊要になっている。柔道はスポーツ化し、フランスでは柔道人口が日本の数倍になり、剣道は勝敗を重視した競技会(試合)が中心となっている。

日本には、道のつく固有の文化がある。道の文化は、自らの生き方や社会との関係をよりよくするために、基本となる技術や作

法などを習得し、自身の徳を高めるためのものである。その、道の文化の習得を目指して諸外国から京のまちにやってくる。日本人は全て道を心得ていると思っていたが、実際にそのみちの奥深さを知って日本人よりも造詣を深め未知の世界に取りつかれた外国人も多い。狭い日本で宇宙への広がりを持つ道の文化。食文化と併せて箸の文化や、漆や竹製品、茶室や日本庭園や盆栽、錦鯉、温泉、民謡、盆踊りなど、和の文化が世界に取り入れられている。

和の国の文化として大切にし、親しみたいものである。市民と留学生や外国人との道の生活文化の交流拠点としての役割も貴重で、単一で無く連携された総合文化として伝道することが必要となる。そして、道の文化には、極めて洗練された芸術性が取り入れられており、芸術との連携も重要な分業の課題である。生活文化としてみると、伝統文化も分業なのである。幸いにして京のまちは、分業が容易な適正な距離感(間のよい空間)を有しており、情報の密度も豊富であり連携した文化の発信が可能である。人類の遺産としてのまちづくりを目指すことが京のまちの宿命である。

〈共同事業の運営形態〉

大学間共同事業は、(大学コンソーシアム京都)、産・官・学・民の共同事業として取り組まれ、京都にある国立、公立、私立のすべての大学が協力共同して運営するという新たな事業体によって運営されている。設立されて〇年、課題はあるものの京都の活性化に大きな貢献を果たしている。その課題として、市民参加をどのように取り入れてゆくかという問題と、スポーツ、芸術、伝統工芸、伝統文化を対象にした京都文化への取り組みがある。京都の文化を教育や学問に取り入れてゆく、いわゆる「京都学」への挑戦である。特に、伝統文化は、自らを高めるといような修

業的環境にあり、常に変化しつづける生活文化に融合されるなど、また仏事や神事として神聖化され証明文献として学問化されにくい。体験学習としてその道に入り込む学習が必要で、生涯教育の課題として長期にわたる複合的なカリキュラムが必要となり、十分な取り組みとなっていない。

少子化により止む無く統廃合され、廃校になった小学校に、明治時代に町衆の力で設立した番組小学校がある。この施設の活用には、それぞれの町衆の協力と参加が必要となる。大学間共同事業で積み残した市民参加の共同事業が重要な課題として認識しなければならぬ。この共同事業は、多様な組織や市民参加によって従来の公益法人にない共同運営の課題について、京都から新たな市民文化の創生への挑戦を試みることになる。そして、公共事業の効率化と施設設備の有効利用や地方行政の充実という課題にも答えることになる。

〈終わりに〉

とりわけて、江戸時代に花開いた日本固有の伝統文化を引き継いだ京の役割として、人類的な文化資産を継承し発展させるまちづくりが基本的な課題でもある。

我が国が観光立国として世界に文化を発信するためには憲法9条は基本的理念として守らねばならない。東京オリンピックを指して、観光客の誘致に力を入れることを東京都はいつている。その一つにカジノ（賭博場）政策がある。それでも競輪、競馬、競艇、オートレース、パチンコ、サッカーくじ、宝くじ、賭け麻雀、野球賭博（甲子園）、ゲーム賭博、株など認められていないものも含めて多くの賭博が行われており、まさに賭博立国の感がある。

観光立国の政策は、日本の持つ固有の文化を観光資源の基本に据えることが最も重要であり、そのためには京都が文化都市として発展することが重要となる。